

「2人ともいってらっしやうい！  
小林さん、愛してますよう！」

「はいはいトール、行つてきます」

「トール様、いつてきます」

バタン

……行きましたかね……)

はあ……)

数分後

「おはよ〜トールちゃん♡」

「…うるさいんですよ…  
ご近所の方々に変な噂立てられたら  
どうしてくれるんですか…このクズ…」

「別にいいじゃん、もうバレてるって♡  
トールちゃんが頻繁に男連れ込む  
ヤリマンってことはさ♡」

「なっ…!!  
元はと言えばあなたが…!!」

「はいはい  
も〜そんな事どうでもいいからさ…  
さつさとパコろうぜ〜  
先輩が帰ってくる前に…さ♡」

「くっ…このクズオス…」

「うひょく相変わらずさいいっく〜♡」

「.....」

「あのかつちりしたメイド服の下に  
こんなドスケベボディ隠してんの  
犯罪だろ〜...」



「相変わらず汚らしい語彙ですね…」

「そんな褒め言葉どうでもいいですから  
さっさと初めてくださいさい…!」

イラスト





「そ……それと……」

小林さんには手を出してないんでしようね……!!」

「出してないって!!」

第一トールちゃんみたいなデカ乳エロ女抱けるなら  
小林先輩みたいな地味っ娘に手出す理由ないっしょ!!」



「あ……あなたって人は……  
本当にどこまで軽薄で……!!」



（…はあ…なんでこんなことに…）

（元はと言えばあの日…  
新人歓迎会で遅くなると言つてたあの日のこと…）

（妙に帰ってくるのが遅い  
小林さんを迎えに行く為に探しに行つてみれば…）

（このクズが小林さんを手籠にする寸前で…）



(思い出すだけで反吐が出そうですよ……)

(コイツを殺す訳にもいかない……  
小林さんに強姦されかけたという  
シヨツクを与えるわけにもいかない……)

(咄嗟に思いついた解決策……私が身代わりになって  
このクズから小林さんを助けるといいう選択は……  
本当に合っていたんでしょ……)



(私なら、このクズを自然死に見せかけて  
殺すことだって出来る……  
いっそそうしてしまえば……楽に……)

「何怖い顔してんのトールちゃん♡」

「小林先輩のこととか  
どうでもいいーからさー♡  
さっさとこれで気持ち良くなろうぜえ……？」



(き…来たっ…デカチンポ…♡)

(なんなんですか…  
相変わらずこの大きさ…!)

キムン♡

キムン♡

(ひ、人のものじゃないですよ全く…♡  
たかが人間のクセに…生意気な…♡)

ビュッ♡

ビュッ♡

「トールちゃんって  
やっぱエロいことに対して貪欲だよねえ♡」

ドキドキ♡

「さっきまであんなツンケンしてたのに…  
チンポ出したらガン見すんだもんなあ♡」



「はっ…はあ!？」

「別にそんなことありませんから!!  
ふざけてるんですか!!」

「うっ、殺しますよ!？」



「ひく怖い怖い♡」

「でも俺：：トールちゃんが俺のこと殺したりしないって  
なんとなく分かったちやうんだよなあ♡♡」

「こんなところで殺したらトールちゃんのだあいですきな  
小林先輩に迷惑かかったちやうしい：：」

「何よりこのデカチン：：  
味わえなくなつちやうもんなあ♡♡」



「…合ってるのは…ぜ、前者だけです…!!」

「別に、下等な人間如きの性器なんて…  
味わえなくてもいいですから…!!」

くっ…

「強がっちゃってさあ♡」



「…じや、そんな強がっちやってる  
トールちゃんのおムツチりおまんこ…  
さっそくいたただいちやおうかなあ…つと…つと…♡」

ニキニキ

「す…好きにしたらいいじやないですか…!!  
下等種族…!!」

ビョ  
トオ♡

ん……♡

ん……♡

♡♡

あーん……♡

「ほお……♡……♡……♡」

「なんだよトールちゃん  
前戯してもないのに  
びっちょよびっちょ♡」

「だ…だまり、なさい…っ…」

「ドラゴンは…  
こういう生態なんで…すう…！」

ゾクゾク♡

「初めての時は  
全然濡れてなかったのによく言うぜ♡」

「嘘が下手だなあ〜全く…」

ずびり♡



「…い、いいから…!!  
早く終わらせ…なさい…!!」

「はあ〜い♡」



「声抑えちやつて可愛い♡  
そんなご近所さんにバレるのが嫌なわけ？」

イライラ...

「バレたいわけじゃないでしょう……!!  
…バカなんですか…!!」

アッ♡

ズッ♡

「声荒げちやったらズレちやうよ〜?」

「くわんわんの……!!!」

ポーンポーン



「?!」

(こんな時間に…誰でしょう…?)



「トロールー!! いる〜?..」

「えっ、小林さん!?!」

ドキミン

「えっ、先輩かよ...都合わり〜...」



「ちよ、ちよつと退きなさい……！  
小林さんのところに行かなきゃ……！」

「そんなカツコでどうすんだよW」

「う、うるさいですね……!!あつ、こつ……これで……!!」

（うつ……こつ、これ……!!  
ええい、仕方ない……!!  
何も着て行かないよりはマシです……!）

（あーもう………なんでよりもよつて  
これからつて時に………）

（え……私今………  
とんでもないことを考えませんでしたか……?）

かき

「ど、どうしました？小林さん…」



「あ、いたんだ」

「出てくるの遅いから  
いないのかと思つたよ」



「い、いるに決まってるじゃないですか」  
「…あはは…」

「それで、どうしたんですか小林さん…?」



「ああ、会社に持っ  
て行く書類と…  
鍵忘れちゃって…」

「取りに帰ってき  
てさ、  
机に置きっぱなし  
だと思っただけど…」





「そ、そんなことでしたか！  
取りにいつてきますよ……！」

「そ、それに……電話してもらえば  
持つて行つたのに……」

「いやあ、それは悪いらしい」

「と、取っつけてくるので  
少し待ってもらえますか？」

「うん、お願い」



バツバツ  
ハッハッ  
……

（……にしても、なんてカッコだよトール……）

（あれアタシのシャツだよな……  
胸元パツツパツだったし……）

（戻って来たと言わなきやな……）

「そ……返……くだ……い！」

「……キス……て……れた……返……やる……」

（あれ、なんか声する？気のせいかな……）

（あ……いや、気のせいじゃないな……靴がある……）

（男物の靴……？）

あのトイレが？男の人を招いてる……？）

（珍しいこともあるもんだなあ……）

（男の人の目の前であの格好は  
さすがに常識なさすぎだろトールウ…）

（戻って来たならそれも言わないとな…）

A blonde anime-style girl with large, segmented golden horns. She has long, straight blonde hair with red tips and is smiling with her eyes closed. She is wearing a white, long-sleeved button-down shirt that is tied at the waist, revealing a large cleavage. She is also wearing a purple bikini bottom. The background is a simple indoor setting with a wooden floor and a door handle.

「お、お待たせしました小林さん!!」

「ん、ありがとうトール」

「それにしても…トール…」

「家に人招く時は  
そんな格好してちやダメだからね？」

「メイドたるもの…」

「あつ、ご、ごめんなさい…!!  
す…すみません…」



「それに、男の人が相手なら余計にね？  
下品な女だと思われちやうよ」

「う…どうしてそのことを…？」

「靴見れば分かるよ」

「…それに、そのシャツアタシのでしょ？  
胸元伸びちやうから勝手に着ないでよね」

「は、はい…」



「…最後に、変な揉め事起こさないうように  
それじゃもう行くから」

「ら…行くてらっしやら…」



八  
月  
二  
日



「はぐ、にしても変なところで来たなあ  
いつつ間が悪いんだよな、小林先輩」

「……小林さんの話は  
しなくてもいいでしょう……!!」





「あなたのせいで  
随分と恥をかかされましたよ、  
もう……」

「は、早くしてくれませんか……」

「あなたみたいなのが……  
違つて私にはやることが……」

「そういう建前いいからさく  
素直に俺のちんぽ欲しいって言えばよ」

「言わないと入れてあげないよ？」

ゴクッ...



「な、なんですかそれ…  
建前なんてありませんよ…」

「本当に私は忙しくて…」

「うつせ♡本当は  
ちんぽ欲しくて欲しくて  
仕方ないから急かしてんだろ？」



「何回も何回もマンコほじくった…  
弱点ぜえんぶ分かりきってる  
俺のこのデカチンがよ♡」

ドキッ♡

「……♡」





「早く欲しくて欲しくて仕方ないから  
適当言って急かしてるわけだ♡」

「みつともないぜトールちゃん♡  
素直に言えばいいのによ」

「だっ…黙りなさい…劣等種…♡」

ソワソワ

「…ふうん…」

「はあ…萎えちまったし  
もう帰ろっかなあ」



「な……っ!!」

「トールちゃんのだわりにい…  
小林先輩でも使っちまおうかなあ〜♡」



「この…っ…そんなことしてみなさい…  
本当に殺しますよ…!!」

「けっ、どうせ殺せないクセに♡  
ほら、早くおねだりしろって♡」





「……ん……ん……」

ん……ん……



「……あ、あなたの……ち……ちんぽ……  
く……くささい……っ……」

「これでいいですか……!!」



「ダメだ♡  
もつとエロく言え♡」

「人間様のちんぽをだらしなく欲しがれ」

「それと…大好きな『小林さん』のこと  
裏切っちゃうんだから、ちやんと謝つとけよ〜?」

「……あなたはどれだけ性格が悪いんですか……」

「それは褒め言葉だったの  
いいから言え♡」



「……」

「……か……下等種族の人間のちんぽが……  
子種汁……が……ほ……欲しくて……  
だらし……なく……おねだりします……」

「お願いします……気持ちいいの……  
め……っ……恵んで……ください……♡」





「小林さんが…仕事してる最中に…  
小林さんのことを守る為とはいえ…  
クズオスと交尾します…♡」

「…ゆ…許してくださ…♡」

「よく言えたなあ〜…でも…」

「なあんかまだ人間のこと見下してんなあ〜?」

「So…」



「……人間様のちんぽ……  
く……く……ださい……♡」

マ  
ク  
マ  
ク  
♡





「よお〜♡」

「じゃあたっぷりくれてさるよ」









おっぱい  
おっぱい  
おっぱい

おっぱい  
おっぱい  
おっぱい

おまんこ  
おまんこ  
おまんこ

おまんこ  
おまんこ  
おまんこ

ぽんぽん

ぽんぽん

びしょ

びしょ





おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

おっぱい

「オイ、キスすんぞ  
舌出せ」

「な…何を言って…♡」





あゝ

いっしょ♡

あゝ

あゝ

ちゅっ♡

ちゅっ♡



「絡めろ」

「ふぁ……ら……♡」



♡  
おっぱい♡

♡  
おまんこ♡

おっぱい♡

おっぱい♡

お尻♡

お尻♡

お乳♡

お乳♡



「ぶち...♡」

おっぱいす♡

「出すから締めろよ雑魚ドラゴン♡」





うん...

うん...



おっぱい♡

んんん♡

おっぱい♡

んんん♡

おっぱい♡

んんん♡

おっぱい♡



あー...気持ちいい



如深♡



グッポロ



あ  
い  
♡  
あ  
い  
♡

あ  
い  
♡  
あ  
い  
♡

「ふう……まだやるぞ♡  
…『雑魚ドラゴン』…♡」

「の…望むところですよ…下等種族…♡」





（小林さん……これは、あなたを守る為なんです……）

（決して……決して気持ちよさに流されてる訳では……  
わ……分かっててくれますよね……？）